



第9回

モーツァルト交響曲 全曲演奏会

2011年10月10日(祝・月)

◆開演◆14:30◆

会場:ザ・ハーモニーホール

<小ホール>

(松本市音楽文化ホール)

主催:モーツァルト交響曲・全曲演奏会 実行委員会

共催:長野県松本深志高等学校音楽部志音会・松本室内合奏団・松本交響楽団・安曇野シンフォニー楽友会・松本あづみの音楽祭

後援:松本市・松本市教育委員会・塩尻市・塩尻市教育委員会・安曇野市・安曇野市教育委員会・(社)才能教育研究会

信濃毎日新聞社・SBC信越放送・NHK長野放送局・長野エフエム放送・(財)八十二文化財団

よこしまかつと

モーツァルトが残した大きな遺産は数多くの名曲だけではありません。

今回の全曲演奏会では彼や彼の家族が残した手紙・書簡をご紹介しながら、モーツァルトの生涯を振り返ってみたいと思います。モーツァルトの人間性も垣間見ることができるかもしれない今回の第9回全曲演奏会にご期待下さい。

家族の手紙

モーツァルト家の手紙は18世紀およびそれ以前の作曲家のなかで、現存するもつとも膨大かつ詳しい内容をもつものである。1755年から1791年にかけて、モーツァルト、彼の父、母、姉が書きのこした手紙は、全部でおよそ1200通に達する。このほかに400通ほどがあるが、そのほとんどは1791年以降、モーツァルトの未亡人コンスタンツェと姉ナンネルによって書かれたものである。

1756年およびそれ以前では、父レーオポルトの数通の手紙だけが知られている。それらの多くは、アウグスブルクに住む彼の友人で出版社を営むヨハン・ヤーコブ・ロッターに宛てた手紙で、《基礎ヴァイオリン教程試論》(1756)の出版に関するものである。1756年2月9日付の手紙のなかで、レーオポルトは次のように述べている。

……君に知らせなければならないことがあります。実は一月二十七日午後八時、妻が無事男児を出産しました。母子ともに順調です。妻から君と奥様によるしくとのことです。息子はヨアネス・クリソストムス・ヴォルフガング・ゴットリーブ(モーツァルトの洗礼名)という名です。……

手紙の主要部分は1762年(6歳)のウィーンへの家族旅行で始まり、それに1763～66年(7～10歳)の大旅行、1767～68年(11～12歳)のウィーンへの帰還の様子を述べたものへと続く。これらの手紙の多くはザルツブルクのモーツァルト家の家主ヨハン・ローレンツ・ハーゲナウアーに宛てたもの〔第2、3、6回全曲演奏会プログラム参照〕で、そこにはヴォルフガングの活動ばかりではなく、各地域の行事や名士たち、さらに仕事として18世紀の演奏旅行をいかに遂行するか、などが述べられている。

……ここに記念すべきモーツァルト最初の手紙・全文をご紹介します。

この手紙の宛名人の少女はモーツァルト一家と親しく交際していたギロフスキー家のマリア・アンナ・カタリーナだとされている。

『モーツァルトよりある少女に』

親愛なる友よ！

〔ザルツブルク 一七六九年(?)〕

失礼ですが、ほんの数行であなたを困らせることをお許しください。でも、きのうあなたはどんなことでもわかると言ったし、ぼくの望むことをラテン語で書いてよこしてもいいと言ったので、いろんなラテン語を数行どうしてもここに書き送りたいのです。あなたがこれを読み終えたら、ぼくの返事を、ハーゲナウアーのうちのひとに届けてもらえませんか。うちのナンドル〔モーツァルト家の女中〕は待てないのです。(でも、ぼくにもやはり手紙で返事をくれなくてははいけませんよ。)[以下ラテン語] 怠けることがどうしてこんなに多くの若者たちに好かれるのか知りたくてならないが、叱ったり叩いたりしても彼らを怠けさせないようにすることはできない。(一七六九年)

1770～73年(14～17歳)にイタリアから書かれた手紙はこの旅行がモーツァルトと父のみだったこともあって、おもにレーオポルトから妻宛に書かれた。それらの手紙の中には、モーツァルト自身の最初期のいくつかの手紙も含まれる。初期の手紙をご紹介します。

親愛なるお姉さん [ローマ、一七七〇年四月二十一日]

ポーニャから送った、例のピックさんがミラノで踊ったメヌエットが気に入ったようで、うれしくなりました。ローマからの最初の手紙で送ったあのコントルダンスはついたでしょうね。どんなに気に入ったか、いずれ素直にお聞かせ下さい……〔以上イタリア語〕---略---

1773年から1777年にかけての手紙は、モーツァルト一家がその時期大部分をザルツブルグで過ごしたために、その前より少なくなっている。そして1778年以降のウィーンからの手紙は、当時のモーツァルトの活動と大成功の輝かしい記録である。たとえば1784年3月3日付の手紙で、モーツァルトは2月26日から4月3日までのおいだに20回以上の演奏会に出演し、しかもこれらの演奏会の多くに新作を発表しなければならないと報告している。

親愛なるお父さん！----- [ウィーン 一七八四年三月三日]

二月二十四日付のお手紙たしかに受け取りました。---略---ほとんど手紙が書けないのをお許しください。でも、絶対に時間がないのです。というのは、今月の十七日から四旬節に毎週水曜日三回、トラットナー邸のサロンで予約演奏会を三回開きますが、これにはもうすでに百人の予約者があり、当日までにはまだ軽く三十人は集まるでしょう。---略---そこで、ぼくがどうしても新曲を演奏しなくてはならないことが想像していただけるでしょう。---したがって書かざるをえません。---略---

1787年5月にレーオポルトが亡くなると、家族間の通信は実質上、終わりを告げる。モーツァルトの生涯最後の手紙は妻に宛てた物で1789年のライプツィヒ、ベルリン、ドレスデンへの旅行中にまた1790年のフランクフルト・アム・マインへの旅行中に書かれている。

ここでモーツァルトが残した現存する最後の手紙を全文でご紹介したい。死を数ヶ月後に迎えるモーツァルトの妻への愛と温かさが感じられる手紙である。

『モーツァルト 最後の手紙』

モーツァルトよりヴィーン近郊バーデンの妻に

[ヴィーン、一七九一年十月十四日]

最愛、最上のかわいい奥さん

きのう、十三日の木曜日、ホーファーはぼくを連れ出してカールのところへ行った。そこでぼくらは昼食をとってから、みんなでヴィーンに戻った。六時にぼくは、馬車でサリエーリとカヴァリエーリ夫人を迎えに行き、棧敷席に案内した。---それから急いでホーファーのところに、その間待たせておいたママとカールを迎えに行った。サリエーリたちがどんなに愛想がよかったか、きみには想像もつかないだろう。---二人とも、ただぼくの音楽だけではなく、台本も何もかもひっくりかえりに気に入ってくれたことか。---彼らは口をそろえて言っていた。「これこそオペラ〔オペローネ〕だ。---最大の祝祭で、最高の王侯君主を前に上演されて恥ずかしくないものだ。---きっとまたなんどか観に来よう。こんなにすばらしい、気持ちよい出し物は見たことがないので。」---

彼⁽¹⁾は序曲から最後の合唱まで、実に注意深く、観たり、聴いたりしていたが、「ブラヴォー」とか「美しい」とか、およそ感嘆の言葉を吐かなかった曲はなかった。そしてぼくの好意に対して、いつまでも繰り返しお礼を言っていた。彼らはきのうぜひオペラに来たいと思っていたそうだが、なにしろ四時にはもう座席に坐ってなくてはならなかったからね。---そこできょうは、棧敷席で落ち着いて観たり聴いたりできたというわけだ。---劇場がはねたあと、二人を馬車で家まで送り届けさせて、ぼくはカールと一緒にホーファーのところ

PROGRAM NOTE

で食事をした。——それからカールを連れて家に戻り、ふたりともぐっすり眠った。

オペラに連れて行ったので、カールは大いに喜んだ。——彼は元気そうだ。——健康のためにはこれ以上よい施設はないだろうが、ほかの点では残念ながら悲惨だね。——彼らが育てて世に送り出せるとすれば、せいぜいが善良な農夫だろうよ！——でも、その話はよそう。やっと月曜日にはクソ勉強〔が始まるので〕（ああ、神よ憐れみたまえ）、カールを日曜日の食事のあとまで預かってもらうことにした。きみが会いたがっていることを話しておいた。——

あす、日曜日、カールをきみのところに連れ出す。——そうしたら、そちらで彼をきみのところに引き止めておいてもいいし、さもなければ日曜日の食事のあと、ぼくがまたヘッカーのところへ連れて行ってもいい。その件、よく考えておいてよ。たったひと月で、すぐ駄目になることもあるまいと、ぼくは思うけどなあ！——そのうちピアニストの学校の話もうまく行くかもしれないし、実際に働きかけているのだ。

いずれにせよ、カールは悪くはなっていないが、以前より髪の毛一本たりとも良くなっている。というのは、相変わらず行儀が悪くて、人を困らせて喜ぶのは以前と変わらない。そして、およそ勉強が前にも増して好きでなくなった。なにしろ、彼が自分で白状したところによると、午前中五時間、昼食後五時間、庭のなかをほっつきまわっているだけ。要するにまあ子供なんて、食って、飲んで、寝て、ぶらつくことしかしないもんだ。

たったいま、ライトゲープとホーファーが来ている。——ライトゲープのほうはぼくと食事に残るので、わが忠実な仲間プリームスに、いま市民保養所へ食べ物を取りに行かせたところだ。この男には本当に満足している。ただし、たった一度だけすっぱかされたことがあるけどね。そのおかげでぼくはホーファーの家に泊まることになり、ひどい目に会った。あの家の連中ときたら、とんでもない朝寝坊なんだ。ぼくは家にいるのが一番好きだ。自分の生活の規則にもう馴れてしまったからね。そりゃああのときは、ひどく腹が立ったよ。

きのうは、ペルヒトルツドルフへの旅でまる一日つぶれて、きみに手紙が書けなかった。——だけど、きみが二日も手紙をくれないなんて、許せないね。でも、きょうは間違いなく手紙をもらえると期待している。そしてあしたは、きみと会って話し、心からキスをしよう。

ごきげんよう。 永遠にきみの

モーツァルト

一七九一年十月十四日

ゾフィーに千回のキスを贈る。某とは、きみの好きなようにしたまえ。アデュー。

注(1)サリエリ (2)おそらくジュースマイヤー

【書簡の重要性】

18世紀は書簡文の全盛期といえるほど、人々は手紙を頻繁にやり取りしていた。ヴォルテールやルソーといった当時一流の文化人の全集の重要な部分が書簡集によって占められているのも不思議ではない。しかも手紙自体が長く克明なだけでなく、手紙を出す前にコピーをわざわざ残しておくなど、手紙は後生のための記録として明確に認識されていた。モーツァルトの書簡は、モーツァルトの伝記、作品の真作性・年代・成立に関する情報の基本的資料である。モーツァルトの生活に関する数多くの詳細が、書簡によってのみ伝えられているし、家族旅行の年代や日程、1780年代のウィーンにおけるモーツァルトの活動の多くは、書簡を参照し、それらをつなぎ合わせてのみ知ることができる。同様に、1777年から1778年にかけて旅行中のヴォルフガングに宛ててレーオポルトが書いた手紙は、その見解がまったく偏見に満ちたものであっても、当時のザルツブルグの音楽生活に関する情報を今日に伝えるもつとも優れた資料である。

手紙はまたモーツァルトの創作活動についても多くの情報を与えてくれる。いくつもの作品が手紙のなかでのみ知られている。たとえば《トランペット協奏曲》KV⁶ 47c (1768年11月12日付)、《ピアノのためのロンド》KV⁶ 284f (1777年11月29日付)などがある。

●交響曲 二長調 Sinfonie in D KV181 (162b)

(17歳 1773年5月19日、ただし自筆譜の日付は消しつぶされている。ザルツブルグで作曲)

Allegro spiritoso, Andante grazioso, Presto assai

初期のパート譜セットがブルノ、フランクフルト、レーゲンスブルグなどに見出されることからすれば、このシンフォニーは当時、広く親しまれていたに違いない。ブルノとフランクフルトのパート譜では、二声部のヴィオラ・パートが一つにまとめられ、トランペットは省略されている。またレーゲンスブルグのパート譜は、オーボエ二本かフルート二本の選択を指示している。研究家アンドレは、モーツァルト自身がずっと使用し、遺産にも含まれていたパート譜セットを所持していた。ケツヘル作品目録などには「序曲 Overture」という副題が見られるが、これは誤りで、自筆譜の表題は「シンフォニア Sinfonia」である。

●交響曲 変ロ長調 Sinfonie in B KV319

(23歳 1779年7月9日、ザルツブルグで作曲)

Allegro assai, Andante moderato, Menuetto-Trio, Allegro assai

自筆譜には「一七七九年七月九日ザルツブルグにて、ヴォルフガング・アマデーオ・モーツァルト作」というタイトルが付けられている。ナンネルの日記帳はこの日を含んで同年6月16日から9月14日までのページが失われており、モーツァルトがこのシンフォニーを作曲した理由を知る手がかりとなる他の記録も残されていない。教会や宮廷、私的なコンサートなど通常の用途に向けられたものでないとなると、KV319は、おそらくヨハン・ハインリヒ・ベーム劇団一座のために作曲されたと考えられる。

【ベーム一座とのかかわり】

ベーム一座はモーツァルトの作品の少なくとも2つを一座のレパートリーにしていた(イタリア語のオペラ・ブッフア《偽りの女庭師》をドイツ語のジングシュピールに改作したものなど)。ベーム一座は1779年の4月終わりに6月初めにかけて、ザルツブルグに初めてやって来た。そのとき、モーツァルト一家はベームをはじめ多くの主役級の役者たちと知り合いになった。この一座は50人近くの役者、踊り手、歌手を擁し、同じ年の9月初めにザルツブルグに戻って来て、1780年の四旬節が始まるまで滞在した。したがってKV319は、彼らがザルツブルグに戻って来ることを予想して作曲されたという可能性がある。

●オーボエ協奏曲 ハ長調 Konzert in C für Oboe und Orchester KV⁶ 271k=KV314(285d)

(21歳 1777年、春か夏[4月1日~9月22日] おそらくザルツブルグで作曲)

Allegro aperto, Adagio non troppo, Rondo/Allegretto

成立年代はパウムガルトナー(1950)および《新全集》による。ジュゼッペ・フェルレンディスのために作曲。モーツァルトの手紙によれば、1778年にマンハイムで5回、フリードリヒ・ラムによって演奏されている。同年《フルート協奏曲二長調》KV314(285d)に編曲。オーボエ稿の一部は1920年にザルツブルグで発見されたが、その信憑性については疑いの余地なしとしない。第1楽章第51小節以降のためのスケッチ(9小節分)が現存。

★参考文献 「モーツァルト大事典」ロビンズ・ランドン著、「モーツァルトのシンフォニー」ニール・ザスラウ著、
「モーツァルト書簡全集」白水社、「モーツァルト」岩波書店